

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：34534
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23720427
 研究課題名（和文） オセアニア島嶼地域の聴覚障害者福祉の枠組み構築に向けた文化人類学的研究
 研究課題名（英文） An Anthropological Study for Construction of Welfare System for People with disability in hearing in the Pacific Islands
 研究代表者
 倉田 誠 (KURATA MAKOTO)
 近大姫路大学・看護学部・講師
 研究者番号：30585344

研究成果の概要（和文）：

本研究では、サモアおよびオーストラリアでの現地調査と資料収集を実施し、オセアニア島嶼地域における聴覚障害者と軸とした障害者福祉の実態と課題の検討を行った。その結果、NGO が重要な位置を占める同地域の障害者福祉においては、国際援助が重要な基盤となっており、援助の枠組みに対応して「障害」概念が設定され、NGO や住民はそのような概念や資源を便宜的あるいは実用的に利用しながら「障害」圏ともいえるネットワークを構築していることが明らかとなった。これを踏まえ、援助の枠組みをより包括的かつ柔軟にすることで、このようなネットワークをより広く有効に活用してゆく方向性を提示した。

研究成果の概要（英文）：

In this research project, I conducted intensive fieldwork and collecting materials in Samoa and Australia to consider frameworks and problems of welfare system for people with disability in the Pacific Islands. I could clarify that international aids introduced the concept of “disability” to these societies and people and NGOs constructed “disability sphere” using the resources from the aids opportunisticly and pragmatically. From these facts, I suggested that the framework of international aids get more inclusive and flexible and both aid-givers and aid-takers make “disability sphere” use broadly and effectively.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：オセアニア、サモア、障害者福祉、国際援助、NGO

1. 研究開始当初の背景

オセアニア島嶼地域では、1990年代以降のグローバル化の潮流に乗って国際機関や既存のNGOによる活動が活発化し、障害者福祉の分野でも民間の国際的なネットワークを軸とした新たな枠組みが作られようとしている。こうした枠組みは、これまで実現されなかった国家による福祉を補完する仕組みとして期待される一方、各国家や地域住民との協調関係を構築し、対象社会に即した福祉の枠組みとして十分な継続性を確保で

きるかが大きな課題となっている。

本研究の問題意識は、2002年から2006年にかけてオセアニア島嶼地域のサモア独立国で3回にわたるフィールドワークを実施するなかで醸成されてきた。これらの調査を通して明らかになったのは、主な調査地であったサモア独立国をはじめとするオセアニア島嶼地域の多くの小規模国では、いまだ国家による社会福祉政策が十分に及ばない高齢者福祉や障害者福祉の領域を中心に、政府が地域住民やNGOの関与を積極的に促進し、

それを統制することで各種サービスの提供を実現しようとしている実態である。そこでは、従来からの親族によるケアや地域の看護師による巡回診療といったコミュニティ・ベースの対応を軸とした高齢者福祉に対し、専門の技能や経験を要する障害者福祉では NGO などの国際的なネットワークを有するアソシエーション型の組織に大きな役割が期待されている。しかし、実際には、これの組織が提供する福祉サービスが障害者のライフサイクルの一部に限られる点、組織の活動が障害者間のつながりよりも支援者側の国際的なネットワークに強く依存している点、その結果スタッフの補充や障害者の親族などとの関係に齟齬をきたしている点などの課題も明らかとなっている。

2. 研究の目的

本研究では、主にオセアニア島嶼地域のサモア独立国における障害者支援 NGO「障害者のためのチャレンジ精神の会 (Loto Taumafai Society for Disabled)」の取り組みに焦点をあて、その活動実態や対象社会との関係性、さらには国際的なネットワークを検討することで、同地域の事情に即した障害者福祉のあり方を文化人類学的視点から実証的に研究する。

障害者福祉に関する研究は、これまで国家による障害者教育や生活支援がすでに展開され、制度によって「障害者」として囲い込まれた「先進国」を主な対象として展開してきた。そこでは、例えば、聴覚障害者福祉であれば、近代以降の聴覚障害者教育の普及によるスピーチ・コミュニティ (Speech Community) 形成の意義や、そのスピーチ・コミュニティを基盤としたろう者独自の文化(「ろう文化」)に対する認知などが主要な問題として論じられてきた。しかし、サモア独立国のようなオセアニア島嶼地域の小規模国家においては、障害者教育や生活支援などの制度による囲い込まれたが行われてきた経緯がほとんどなく、聴覚障害者をめぐる議論の土台となってきたスピーチ・コミュニティが形成されているとは言い難い。実際に、本研究が主たる対象とした「障害者のためのチャレンジ精神の会」においても、聴覚障害者は主たる対象の1つではあるものの、他の障害種別の者とあまり区別されることなく、また障害者という範疇も明確でないまま、活動が展開されている。したがって、本研究では、同地域の障害者福祉を、制度的な意味に限ることなく、親族や地域社会、NGO 組織や政府、あるいは援助国や国際機関といった複合的な主体の関与のもとに捉え、より実社会に適した聴覚障害者福祉の枠組みを検討する。

3. 研究の方法

本研究では、(1)NGO 組織の構造と活動実態、(2)支援対象者や住民との関係性、(3)国家内および国際的ネットワークにおける位置づけ、の3点から検討を加える。

まず、「障害者のためのチャレンジ精神の会」の組織構造や活動実態をサモア政府や同組織の関連資料、さらには組織関係者やサービス利用者への聞き取り調査によって解明する。そのうえで、制度や障害者同士の関係性よりも支援者側の国際的なネットワークに依存する障害者福祉の地域的・構造的課題を明らかにする。

次に、支援対象者や住民との関係性に着目し、国家や NGO 組織が提示する「障害」の概念や支援の枠組みが、住民によってどのように理解され、またどのような解釈のもとに NGO 組織の活動に関与しているのかを、各家庭や巡回支援サービスの場合への参与観察にもとづいて考察する。ここでは、従来の障害研究のように「障害」という規定の政治性やそこに潜む能力中心主義に切り込むこと以上に、制度的な囲い込みを欠いたサモアのような状況下において、「障害」という立場が受容されるのかといった、より根本的な地点から検討する。

そして、最後に、組織が活動を継続し展開してゆくうえで重要となるサモア政府や援助国、あるいは国際機関や他の NGO 組織との間の位置づけを検討する。先行研究によれば、地域社会、援助国や国際機関、政府といった「下」「外部」「上」からの圧力こそが、NGO 活動の理念や活動の動向に大きな影響をあたえているという。本研究では、調査対象をこのような関係機関や組織にまで広げ、公文書や報告書といった関連資料の収集や関係者への聞き取り調査によって、そこでの社会的力学を解明し、支援者主導の運営やマイクロレベルでの住民たちとのズレが生じる原因やその調整を阻む構造的な要因を示す。

4. 研究成果

本研究では、サモアおよびオーストラリアで現地調査を行った。サモアでは、「障害者のためのチャレンジ精神の会」で参与観察を行うとともに、障害関連の他の NGO での聞き取り調査を実施した。また、障害者福祉や海外援助の受け入れなどに関与している保健省、女性コミュニティ社会開発省、教育スポーツ文化省を訪問し、担当者への聞き取りや資料の収集を行った。一方、オーストラリアでは、国立図書館やオーストラリア国立大学付属図書館、聴覚視覚障害児のための王立協会やオーストラリア国際開発庁

(AusADID)においてオセアニア島嶼地域の障害者政策に関する資料収集を行った。その結果、研究の方法に挙げた(1)~(3)に関して次のことが明らかとなった。

まず、(1) NGO 組織の構造と活動実態に関しては、「障害者のためのチャレンジ精神の会」は、村落在住の障害者に対するアウトリーチ方式の巡回援助サービスとバス送迎を活用したフリースクールを主な活動内容としている。実際の運営においては、それらに要する資金や資材をほぼ全面的にサモア政府および外国からの援助に依存している。フリースクールには、公教育における就学年齢を超過した者も含めた幅広い年齢層の障害区分や重度を異にする「障害」者とともに、様々な事情で公立学校に通えない／通わない者も通学している。このような現実にも関わらず、外部からの援助には「障害者支援」という名目が付くことが多いため、現場では後者のような者に対して「学習遅滞者(Slow Learner)」といった名称が便宜的に使用されるという事態が生じている。また、スペシャル・オリンピック等の行事に際しては、それに応じて適当な「障害者」集団が暫定的に構成されることもある。これは、そもそも「障害」という括りがなかったサモア社会に国際援助の浸透ともなって「障害者福祉」という枠組みがもたらされ、それを基盤に NGO 活動が興隆した結果もたらされた構造的な齟齬を示す一例と言える。

次に、(2)支援対象者や住民との関係性に関しては、人びとの間における「障害」という認識が、制度による一律的な規定を通してではなく、主に NGO などが提供する支援やサービスへの個別的な接触と関係性の継続・発展を通して受容されている実態が明らかになった。具体的な例としては、「障害者のためのチャレンジ精神の会」による巡回援助サービスでは、各村落に在住する支援対象者に対して個別に支援器具やサービスなどをアレンジし提供している。その結果、制度による「障害」という概念が浸透していない人びとの間では、このような器具やサービスの受容が周囲の人びととの異化や支援組織や他の支援対象者との繋がりを想像させることにつながっている。現在のサモア社会では、こうして生じる「障害圏」とも呼びうるような関係性のネットワークを通して「障害」というものが顕在化している。このような事情から、「障害」という認識は、帰属や個人の属性ではなく、あくまでもこのような関係性の継続を通して認識されている。これは障害者としての連帯という枠組みを難しくする一方で、障害者が集団として排除させるという事態も生じにくくしていると考えられる。

最後に、(3)国家内や国際的ネットワークにおける位置づけに関しては、1990 年代以降

の変遷をたどるなかで以下のことが明らかになった。サモアでは、他のオセアニア島嶼地域同様に 1981 年の国連「国際障害者年」以降、障害者福祉は停滞をしていた。しかし、1990 年代の NGO 活動の興隆を契機として民間主導でのサービス構築が注目され、1997 年にはオセアニア地域での NGO による国際会合を 1 つの契機として全ての NGO の包括組織(SUNGO)が設置されることになった。また、2003 年には障害者福祉関係の政府関係省庁と NGO との間で会合が開かれ、援護の獲得と円滑な運用のための用語や理念の共有が図られた。この際、「障害(disability)」を意味する現地語の翻訳概念「マナオガ・ファッピトア(*manaoga fa'apitoga*: 特別な要求)」も初めて設定された。そして、昨年からはオーストラリア政府による「障害」分野への大規模援助を基盤として、政府関係省庁と NGO との間での意思疎通や役割の確認が進められている。

このような経緯と(1)(2)の検討結果を重ね合わせて見るならば、対外援助や国際的な動向を基盤として政府と NGO との関係付けやその再定義が行われ、それらからの援助を基盤とした NGO のサービスを地域社会の側が選択的に受容している状況が明らかになる。NGO は、変化してゆく援助の枠組みに合わせて「障害」を提示しつつ、実際の活動では「障害」という概念をずらしながら活動の領域と継続性を確保している。一方、人びとは、NGO によるサービス提供等の持続可能性に確信を持たず、あくまでも関係性の 1 つとして対応している。このようなメカニズムにより、現状では「障害」概念をめぐる各層の認識のズレが顕在化されることなく、NGO を軸とした障害者福祉が展開されているのである。

以上のような状況を踏まえると、聴覚障害者福祉の枠組み構築に向けては、まず援助側がこのような援助対象社会の状況を受け止めて障害という援助の枠組みをより柔軟で包括的なものへと調整することが望まれる。本研究が対象としたオセアニア島嶼地域の諸社会では、これまでの国際援助が対象社会に障害というものを制度として創りだそうとする一方で、対象社会の NGO や住民はそれに対応した受け皿としての「障害」を作り出す傾向があった。現実として、小規模なオセアニア島嶼地域の諸社会では社会制度や細かな内部区分を前提として提示される援助側の障害観に対応することは難しく、人びとは実用的かつ流動的に援助を基盤とした資源にアクセスする状況が生じている。この過程で生み出される「障害圏」と呼びうるようなネットワークには、NGO 活動を軸として障害区分を超えた関係性が構築され、当事者がそれまでの社会関係を大きく改変すること

なく参加できるという利点がある。例えば、手話使用者によるスピーチ・コミュニティにしても、社会規模が小さいため障害者のみで構成することは難しく、障害区分を超えた参加・交流や社会から聴覚障害者を切り離さない工夫がより重要になっている。したがって、同地域における聴覚障害者福祉は、制度としての確立よりもこのようなネットワークを調整し広く活用してゆく方向を模索する方が有効であるといえるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

①『『障害の文化』は生まれるか? サモアにおける障害者福祉活動の展開から』日本オセアニア学会第29回研究大会、2011、倉敷

〔図書〕(計2件)

(1)倉田誠,他、風響社、グローカリゼーションとオセアニアの人類学(須藤健一編)、2012、342

(2)倉田誠,他、昭和堂、公共圏とオセアニアフィールドから見た重層性(柄木田康之、須藤健一編)、2012、320

6. 研究組織

(1) 研究代表者

倉田 誠 (KURATA MAKOTO)

近大姫路大学・看護学部・講師

研究者番号：30585344